

はじめに

毎年食品に関わる大きな事件、事故が性懲りもなく発生します。

2016年の1月は、廃棄カツの転売事件で幕が開きました。カツを商品にできない形に処理して廃棄すれば起きなかつた事件です。冷凍食品の農薬混入事件も同様に、中国毒餃子事件を「他山の石」としていれば発生することはありませんでした。

いま考えれば、どの事件、事故も想定できる事象ばかりです。放火されないように、家の周りの燃えやすいものを片付けておくこと、強盗に襲われても被害が少ないように、レジに1万円札は入れておかないことなど「そんなことは起きるはずがない」と考えるのでなく、「起きるかもしれない」と24時間365日対応策を考えておくのが組織責任者の仕事のはずです。

● 組織の倫理観は、その組織の責任者の倫理観を越えることはない

「組織の倫理観は、その組織の責任者の倫理観を越えることはない」。

私が講演、セミナーなどで必ず話す言葉です。北海道の偽装挽肉事件、愛知県の廃棄カツ転売事件、双方ともに組織の責任者自らが進んで違法行為を行っていました。

企業経営を担う責任者には、コンプライアンス(法令遵守)だけでなく、インテグリティ(Integrity: 誠実、真摯、高潔)というように、高貴な「人間性」が求められます。廃棄カッスを転売すること、牛肉の挽肉に豚の心臓を混ぜることなどは、法律に触れるかどうかを考える前に、口にするお客さまの健康を真摯に考えれば、指示できるものではありません。

食品工場は、毎年売上げを伸ばし続け、利益を増やしていく必要があります。しかし、人間性を失ってまで仕事をしてもいいことにはなりません。「組織の責任者がインテグリティを持って工場運営していれば、自然と利益が上がり、地域・従業員からも信頼を得ることができる」、私はそう思っています。

工場運営がうまくいっているかどうかは、売上げ、利益という数字に現れます。損益計算書に現れる数字が工場長の評価になります。一方、損益計算書に現れない数字には、従業員が安心して働いているかどうか、労災の発生件数、離職率、平均賃金などがあります。また、地域とうまくいっているかどうかは、マイナスとなる事象が起きていないか、それはたとえば、浄化槽へのクレーム、騒音、入出荷の際のトラックのトラブルなどが想定できます。これは、地域の皆さんが工場を「さん」付けで呼ぶかどうかであり、タクシーのドライバーに聞いてみるとすぐにわかります。

地域の皆さんの信頼を築くには、とても長い時間がかかりますが、信頼を失うには1つの事故、1つのクレームで十分です。築き上げてきた信頼は、一瞬にしてなくなってしまう。

● 企業倫理の教育の必要性

従業員に対しては、ビジネス・エシックス (Business Ethics) の教育が必要です。ビジネス・エシックスとは「企業倫理」と訳され、企業活動における法令遵守 (コンプライアンス) を含む道徳的規定を示すものです。

企業活動においては、上司に指示された内容が自分自身の倫理に反していても、やむなくやってしまうことがあります。上司が直接具体的な指示をしなくても、常識的にはできないようなことをやってしまうのです。

養鶏場で、鶏ふん処理の経費を節約するために、敷地内に野積みをしていた責任者がいました。ハエが大量に発生し、近所の住民からクレームが殺到しました。個人としては常識・倫理観で行動する人も、「経費節減」と会社に言われてしまうと、信じられないことをしてしまうものです。

責任者の人間性は、教育しても備わるものではありません。しかし、従業員には倫理観を含めて「お客さまの健康に関わる仕事をしているのだ」と教育することで、工場全体の品質は必ず向上すると信じています。

本書が、皆さんの工場の品質向上の参考になることを祈っています。

2016年3月

廃棄カツの報道をききながら

食品安全教育研究所 代表 河岸宏和